

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32633

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K21202

研究課題名（和文）生命の危機的状況にある児と家族の「ふれあい」を促す看護ケアモデルの構築

研究課題名（英文）Nursing practices to promote interaction between children with life-threatening conditions and their family members

研究代表者

西本 葵（NISHIMOTO, Aoi）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：10907653

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生命の危機状態にある子どもと家族のふれあいを促すための看護実践について明らかにすることを目的とし、PICUにて5年以上臨床経験のある看護師10名に半構造化インタビューを行い、質的記述的に分析した。

まず、面会前に備える看護実践という準備段階から始まっており、子どもと家族の対面場面を支える看護実践、ふれあいを促すケアに関する看護実践という身体接触を促す場面での介入が示された。さらに、ベッドサイドで家族に伝える看護実践、子どもと家族のことを知る看護実践という心理面に焦点をあてた介入も見出され、多岐に渡る内容で構成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもが予期せぬ状況で生命の危機状態に陥った両親の不安やショックは計り知れず、機械類に囲まれた状態で積極的に近づき、「ふれあう」ことは容易ではない。また、面会時間は限られた時間であることから、その場面における看護実践を具体的な形で可視化することは意義深いことと考える。

そして、小児専門病院ではない集中治療室の看護師では、面会時の子どもと家族の対応に慣れていないことも考えられる。今後そのような場においても幅広く知識と技術を広めるべく実践ガイド等を開発する必要があるが、本研究結果は基盤的データとなり役立つ。

研究成果の概要（英文）：The present study aimed to elucidate nursing practices that promote interaction between children with life-threatening conditions and their family members. Semi-structured interviews of 10 nurses with at least 5 years of clinical experience in pediatric intensive care units (PICU) were conducted, and their responses were qualitatively analyzed using a descriptive approach.

Intervention found in settings that promote physical contact started from the preparatory stage, i. e., “nursing practices to prepare before meeting,” and included “nursing practices that support in-person settings” and “nursing practices involving care to promote interaction.” Furthermore, an intervention that focused on psychological aspects, such as “nursing practice extended to the family at the bedside” and “nursing practices to get to know the child and their family members,” was also found, showing the variety of nursing practices.

研究分野：クリティカルケア看護

キーワード：小児集中治療室 家族面会 看護実践

1. 研究開始当初の背景

2012 年度に小児専門の特定集中治療室に対する管理料が新設されたことにより、我が国における PICU は増加傾向にある(日本集中治療医学会小児集中治療委員会、2019)。我が子が予期せぬ状況で生命の危機状態に陥った両親の不安やショックは計り知れず、その経験が PTSD を発症させるという報告もあり(西名ら、2020)、患者のみならず家族への看護ケアの重要性が謳われるが、本邦で PICU の看護実践を具体的に可視化した研究は未だ十分でない。また、新生児・小児・成人 ICU の Family-Centered-Care ガイドライン(Davidson et al., 2017)において、面会時の家族との関わりの重要性が提唱されており、さらに親子がふれあうことは相互的に精神的安定をもたらす心的距離を埋める作用があることが複数の研究より明らかになっているが、国外と比較し本邦における面会可能時間は短い傾向にあり(長田ら、2019)、実質的に児と家族がふれあえる時間は限られているという現状がある。昨今の予期せぬ COVID-19 の流行による制限からも、面会時間拡大は容易なものでないと伺える。それゆえに、面会時間の看護実践は“限られた時間の中でのケア”となり、そのケアの質が問われる。また、集中治療領域における患者家族は患者に近づいて何かしたいというニーズがあり、エキスパート看護師が患者に近づけない家族を患者のそばに引き寄せるためのケアを実践していたこと(山勢ら、2013)や、家族が患児のケアに関わるための援助を医療者に求めていたこと(Dahav et al., 2017)も明らかになっており、卓越した看護実践により患者家族の距離が縮まり、両者のニーズが満たされることが示唆されている。

以上のことから、PICU において限られた面会時間で子どもと家族のふれあいを促す卓越した看護実践は必要不可欠であるが、具体的な看護実践内容や方法について可視化したものはない。本研究でそれらを明らかにできれば、子どもと家族が唯一ふれあえる限られた時間において質の高い看護実践を提供することへの一助となると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小児集中治療室(Pediatric Intensive Care Unit: PICU)の面会時間において生命の危機状態にある子どもと家族の「ふれあい」を促すための看護実践を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1)研究デザイン

半構造化インタビューによる質的記述研究

(2)研究対象

研究対象者は、PICU での勤務経験が 5 年以上の看護師とした。

選定方法は、研究者のネットワークによる機縁法とし、研究協力を依頼した。協力の同意が得られた対象者には、文書にて研究目的や内容の説明を行い、必要に応じて対象者が所属する施設の所属長に承諾を得て実施した。

(3)データ収集方法

データ収集は、半構造化インタビューにて実施した。研究者の所属施設でプライバシーが確保

される個室、またはオンライン上(遠隔会議システムを使用)にて実施し、研究対象者の承諾を得たうえでICレコーダーに録音した。

調査は、インタビューガイドをもとに行った。インタビューガイドの作成にあたっては、小児集中治療領域に精通した複数の研究者にスーパーバイズを受け妥当性を検討した。内容は、具体的な看護実践方法、その際の子どもと家族の様子、促進因子や阻害因子等にて構成し、生命の危機状態にある子どもと家族のふれあいを促すための看護実践場面を想起しながら語っていただくよう説明した。

(4)分析方法

インタビューデータを逐語録とし、以下の手順で分析を行った。子どもと家族のふれあいを促すための看護実践として語られた文脈を抽出する。より具体的に記述するために、直接的な介入のほかアセスメントなど思考内容も含めることとした。抽出した文脈の意味内容を損なわないよう留意しコード化する、意味内容が同類のコードを集約し、対象者ごとの看護実践内容を整理する、各対象者のデータを合わせて、類似性と相違性を比較検討しながらサブカテゴリを生成し、継続的に全てのデータを積み重ねていく、新たな内容が抽出された場合は、以前のデータで見落としがないかデータに戻り再確認をする。さらにサブカテゴリの類似性と相違性を検討しながら抽象度を高めてカテゴリを生成する、最後に看護実践として共通する内容を集約し大項目とする。

また、カテゴリ名はデータの文脈として相応しいかその都度確認しながら分析を行った。その過程では、看護実践における経験豊富な研究者に定期的なスーパービジョンを受け、妥当性の確保に努めた。

(5)倫理的配慮

本研究は、研究者が所属する機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。必要時、対象者の所属長の承認も得ることとした。対象者に対して、研究の趣旨や目的、研究方法、個人のプライバシー保護、研究協力あるいは拒否・中断は自由意思であり、辞退しても不利益は生じないことを説明した。また、情報の公開、研究成果の公表などについても文書および口頭で説明し、同意を得たうえで研究を実施した。

4. 研究成果

(1)対象者概要

対象者は10名となり、臨床経験年数は9～24年(平均16.9年)、PICU経験年数は9～15年(平均10.6年)、インタビュー時間は54～81分(平均67.9分)であった。

(2)「ふれあい」を促すための看護実践内容

看護実践内容は、まず、子どもと家族の面会時の状況に関するパターンを把握するといった「面会前に備える看護実践」から始まっていた。そして、家族が子どもと対面した時の反応を捉え「子どもと家族の対面場面を支える看護実践」を行っていた。また、子どもの気持ちを代弁して家族に伝えるなどといった「ベッドサイドで家族に伝える看護実践」や、ニーズを捉える「子どもと家族のことを知る看護実践」、清潔ケアやベッド上での抱っこなど「ふれあいを促すケアに関する看護実践」が語られた。

(3)結語

PICU における生命の危機状態にある子どもと家族の「ふれあい」を促すための看護実践は、身体接触を促すための実践のみならず、多角的な内容で構成された。看護師は、ふれあいを促すために、家族の心理に寄り添い、必要な情報を伝えて、ニーズを把握することを実践しており、これは単に身体の接触だけではなく、心の通い合いがあってこそふれあいが成り立つことを示す知見であるとする。

5. 引用文献

- 1)Davidson,J,E.,Aslakson,R,A.,Long,A.C.et al.(2016). Guidelines for Family-Centered Care in the Neonatal, Pediatric, and Adult ICU. *Critical Care Medicine*,45(1):103-128.
- 2)Dahav,p.,strand.A.S.(2018).Parents' experiences of their child being admitted to a paediatric intensive care unit: a qualitative study-like being in another world. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*,32:363-370.
- 3)長田艶子,入江安子,辻本雄大ら(2019).集中治療室における面会制限に関する研究 国外文献から日本のあり方への展望 . *奈良看護紀要*,15:2-13.
- 4)日本集中治療医学会小児集中治療委員会(2019). わが国における小児集中治療室の現状調査. *日本集中治療医学会雑誌*,26:217-25.
- 5)西名諒平,岩田真幸,増田真也ら(2020). 小児集中治療室入室時の両親の不安・抑うつ・PTSDの実態と経時的変化. *小児保健研究*,79(2):140-151.
- 6)山勢善江,山勢博彰,立野淳子.(2013). 救急・クリティカル領域における家族看護の構造モデル. *山口医学*,62(2):91-98.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西本 葵
2. 発表標題 生命の危機的状況にある子どもと家族のふれあいを促す看護実践
3. 学会等名 第30回PICUワークショップ
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------